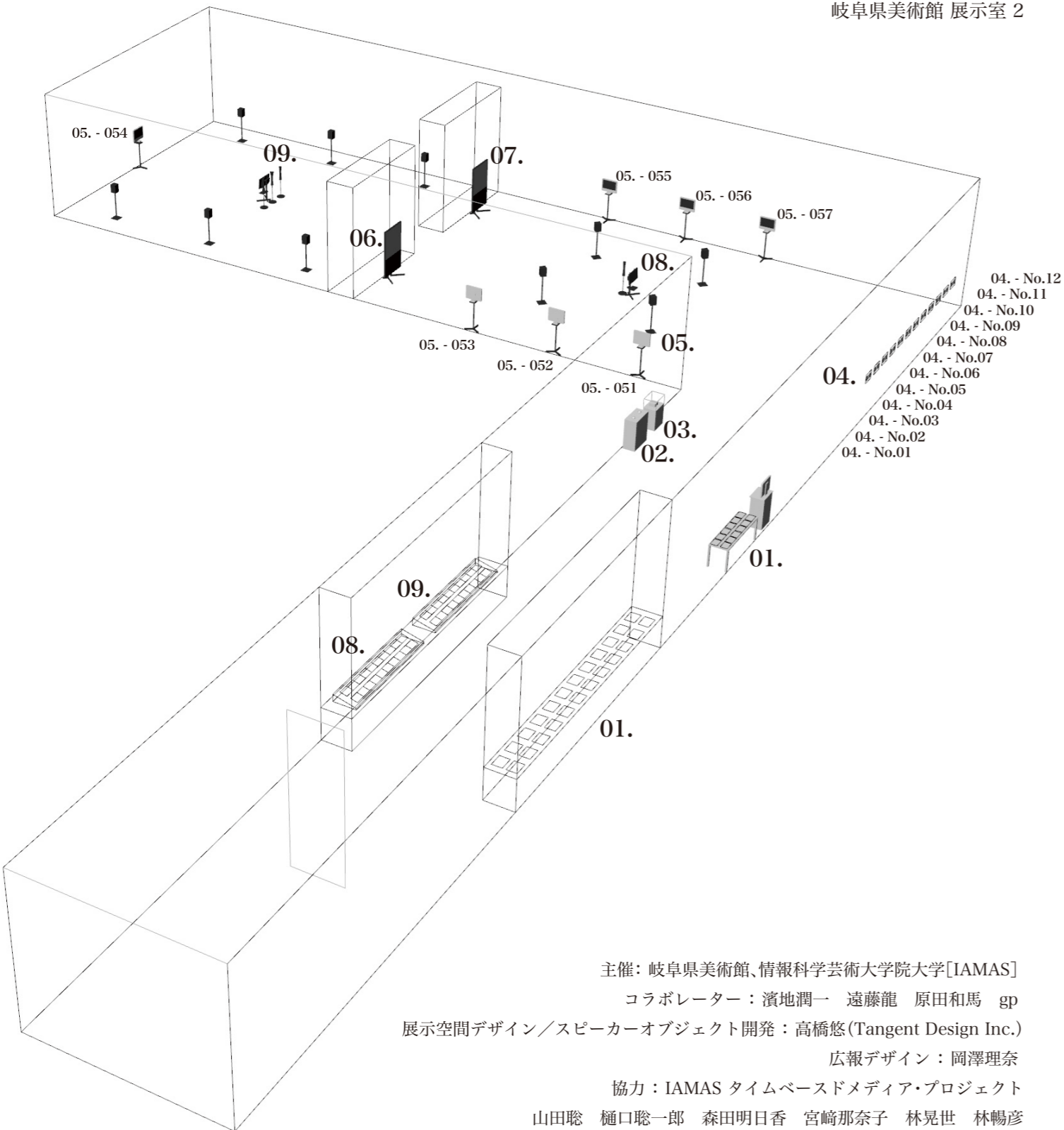


記譜、そして、呼吸する時間

Notation, and the time breathes

2022年7月5日(火) - 9月11日(日)

岐阜県美術館 展示室 2



主催：岐阜県美術館、情報科学芸術大学院大学[IAMAS]

コラボレーター：濱地潤一 遠藤龍 原田和馬 gp

展示空間デザイン／スピーカーオブジェクト開発：高橋悠(Tangent Design Inc.)

広報デザイン：岡澤理奈

協力：IAMAS タイムベースドメディア・プロジェクト

山田聡 樋口聡一郎 森田明日香 宮崎那奈子 林晃世 林暢彦

<https://www.iamas.ac.jp/af/08/>

展覧会開催イベント等、更新される情報については、特設サイトをご覧ください。



01.

変容の対象 2009 - 2020

2009 - 2020

濱地 潤一 + 福島 諭

楽譜(紙 / データ / web)

《変容の対象》再生プログラム

自由即興は奏者間のやりとりがその場で消えるのに対して、《変容の対象》は、何らかの形で記譜し、再現性を持たせることを目的に発案された共同作曲の試みである。作曲上の規則は、濱地潤一と福島諭の発案による。1曲の作曲期間を「ひと月」に定めて、規則に従って互いに五線譜(データ)を交換しながら作曲が進められる。このやり取りは、2009年元旦から開始され現在も続いている。本展覧会では、1ページに1曲を納めた楽譜とシミュレーション音源の再生プログラムとを、2009年から2020年までの12年分、展示する。



<http://www.shimaf.com/h>

作品規則

- (0)ひと月に1曲の小品を作曲し1年間の12曲をひとつの組曲とする。
- (1)楽器は福島諭がピアノ、濱地潤一がサクソフォンを担当する。
- (2)五線譜を使用して各楽器を交互に作曲していく。
相手の書いた最新の小節に対して自分の楽器パートを書き込むことができ、次に続くもう1小節を新たに書き加えることで最大2小節の作曲を毎回行うことができる。
- (3)自分が新たに書き加える小節の拍子、テンポは任意に変更できる。
楽譜に記入していく。
- (4)作曲した小節は相手に渡した時点で固定され後に削除/変更はできない。
- (5)月の最初の1小節目を書く者は月ごとに交代する。また、各年の最初に書く者も年ごとに交代する。
(よって12月と次の1月は同じ者が担当することになる。)

2013年 第13回文化庁メディア芸術祭「アート部門」審査委員会推薦作品

特別展示

02.

エレクトロニック ラーガ

1979

佐藤 慶次郎 (1927 - 2009)

岐阜県美術館所蔵

《エレクトロニック ラーガ》は佐藤慶次郎がオブジェ制作へ向かう契機となった作品である。初期型は手のひらに乗るほどの小型のもので1960年代後半から1970年頃に制作された。今回展示される大型のモデルは、上部に設置された2つのマウンド状の金属部に両手で触れることで音階を発する。接触面積に応じて音が変わり、面積が広いほど音は高くなる。発音原理は特許が取得されている。特許公報内には「簡易楽器の一種」「無限変奏を即興的に行う事が出来る」などの記述がみられる。

03.

花開

1974

佐藤 慶次郎 (1927 - 2009)

岐阜県美術館所蔵

《花開》は1974年に制作された佐藤慶次郎の電子オブジェである。正方形の石膏の台座から12本の軸が花を模した形で展開し、各軸にはひとつずつ素子となるマグネットリングが備えられている。素子が不規則に上下運動を繰り返す様子は植物が花開く際のエネルギーを表しているようにもみられる。この作品の花は菊の花を模している。

※佐藤慶次郎は作曲から造形へ表現を拡張した先進的な作家です。この度、福島諭との共通点を探る試みとして特別に展示します。

04.

並列画像 No.01 - No.12

No.01 e_211031 f_211120

No.02 e_211127 f_211126

No.03 e_211212 f_211229

No.04 e_220101 f_220101

No.05 f_220126 e_220103

No.06 f_220129 e_220208

No.07 f_220211 e_220210

No.08 f_220218 e_220223

No.09 e_220225 f_220313

No.10 e_220406 f_220325

No.11 f_220507 e_220417

No.12 f_220507 e_220523

(No.00 左画像 右画像 の順に記載)

2021 - 2022

制作 | 遠藤 龍 + 福島 諭

写真プリント | 遠藤 龍

この「並列画像」と題される試みは、遠藤龍と福島諭による静止画データを介した一連の試行の中から派生したひとつの制作方法である。左右に配置される画像(写真イメージ)は、それぞれ遠藤と福島のどちらかが提出した1枚である。このやり取りの規則は極めてシンプルであるが、相手が最初に置いた画像の反対側にもう一方がどのような1枚を返すかにより左右の写真による響き合いが生まれる。

今回は各画像を並列に並べたプリントで展示される。プリントは遠藤龍が担当した。各タイトルは画像が相手に送られた日付と、担当者を表すアルファベットで構成される。「e」は遠藤、「f」は福島が担当した事を表している。

作品規則

- ・正方形の静止画データ(3000pixel×3000pixel)を用いる。
- ・左右に配置される正方形の空間があるとする。
- ・2名のうちどちらか一方が、左右の指定と共に静止画データを提出する。
- ・もう一方が残りの空間に静止画データを提出する。

05.
Twill The Light (051-057)
2018
写真データ、ヴィジュアル プログラミング | 福島 諭
音響 | gp (濱地 潤一 + 飛谷 謙介 + 福島 諭)
ムービーMP4 (H.264)
1’00”

《Twill The Light》は、福島個人のプロジェクトとして2017年から制作されている映像シリーズである。個々のデジタル静止画に留まる画像情報を初期値として扱い、静的なプログラミングによって画像が連続的に処理されていく。左右の画像情報が比較処理されながら中央の動画として新たなイメージを作り出していく。

今回展示される7作品は、使用されている音源がすべてgp(ジーピー)によるものという共通点がある。gpはメンバーの濱地、飛谷から提供されるギターの演奏素材を後日福島が変換・加工し再構成するという制作的特徴を持つ。異なる場所・時間で録音された素材を用いて新たなサウンドを作り出すというあり方は、《Twill The Light》の視覚イメージの生成方法と類似する。

.....

06.
20211001 -
2021-
制作 | 遠藤 龍 + 福島 諭
スライド制作 | 遠藤 龍
ムービー HEVC (H.265)
3’10”

《変容の対象》で試みられた五線譜を介したやり取りを、静止画データを介したものと置き換えようとする目的で、映像／写真を専門とする遠藤龍と共に2020年より試行している。静止画データは3000pixel × 30000pixelの解像度のものを扱う。さまざまな制作規則の変遷を経て2021年10月1日から開始したものを今回はスライド形式で展示する。規則は《変容の対象》のものに準じつつも、同じ静止画データに対してお互いが加工の手を入れていくという点では大きな差異がある。また、制作期間は無期限として、現在もやり取りを続けている。

作品規則
・正方形の静止画データ(3000pixel×3000pixel)を用いる。
・どちらかが最初に提示した静止画データに対して一方が何らかの処理を加え返答する。
・期限を無期限として続ける。

07.
No.1 20211120 - 1128
No.2 20211201 - 1210
No.3 20211211 - 1226
No.4 20211227 - 20220110
No.5 20220111 - 0125
No.6 20220126 - 0210
No.7 20220211 - 0316
No.8 20220319 - 0416
No.9 20220418 - 0525
2021 - 2022
制作 | 原田 和馬 + 福島 諭
スライド制作 | 原田 和馬
ムービー HEVC (H.265)
10’26”

遠藤龍+福島諭の試みた静止画データを介したやり取りを、デジタル処理によるビジュアル作品を専門とする原田和馬と共に行ったシリーズ。基本的な制作規則は変わらないが、何度かの試行を経て作品の終わりどころは両者合意の上で決定される点が遠藤龍のものとは異なる。

今回は各画像を繋いだスライド形式で展示する。動画の制作は原田和馬が担当した。画像のファイル名は画像が相手に送られた日付と、担当者を表すアルファベットで構成される。「h」は原田、「f」は福島が担当した事を表している。

作品規則
・正方形の静止画データ(3000pixel×3000pixel)を用いる。
・どちらかが最初に提示した静止画データに対して一方が何らかの処理を加え返答する。
・互いに確認し合意の上でやり取りを完結する。

.....

08.
設置音楽《patrinia yellow》for clarinet and computer
2022
作曲 | 福島 諭
音源 | 鈴木 生子(クラリネット)
スピーカーオブジェクト | 高橋 悠(Tangent Design Inc.)

コンピューター / 再生プログラム / 4つのスピーカー / オーディオ・インターフェイス / 1つのスピーカーオブジェクト
11’00”
毎時0分、30分、45分より開始

「《patrinia yellow》for clarinet and computer」は2013年に作曲された、ひとりのクラリネット奏者とコンピューターのためのライブエレクトロニクス作品である。楽曲はクラリネットの演奏音をリアルタイムにサンプリングしながらコンピューターが加工・再構成を行う。クラリ

ネットの演奏を音楽の種としながら楽曲全体は女郎花(オミナエシ)の一年の周期を模倣するように展開していく。楽曲は大きく3部に分かれ、それぞれ「花茎の成長」「開花」「衰退」を表す。

今回は舞台上での演奏ではなく、展示空間内に設置され再生される音楽として展示される。4つのスピーカーの中央に置かれる特殊スピーカーはクラリネット奏者を象徴しており、ここからは初演者である鈴木生子氏の演奏音流れる。コンピューターはその演奏音をリアルタイムに録音／加工処理し周りの4つのスピーカーから出力していく。演奏者が不在というほかは、作品の上演に必要な理想的なシステムによって楽曲は再生される。

2014年 第18回文化庁メディア芸術祭 アート部門 優秀賞

.....

09.
設置音楽《春、十五葉》-五管の木管アンサンブルとコンピュータのための-
2022
作曲 | 福島 諭
音源 | 鈴木 生子(クラリネット)、伊藤 めぐみ(クラリネット)、櫻田 はるか(クラリネット)、山口 裕加(オーボエ)、濱地 潤一(アルトサクソフォン)
スピーカーオブジェクト | 高橋 悠(Tangent Design Inc.)

コンピューター / 再生プログラム / 6つのスピーカ / オーディオ・インターフェイス / 3つのスピーカーオブジェクト
15’00”
毎時15分、45分より開始

「《春、十五葉》-五管の木管アンサンブルとコンピュータのための-」は2015年に作曲された、5名の木管奏者とコンピューターのためのライブエレクトロニクス作品である。楽曲は木管アンサンブルの音をコンピューターがリアルタイムにサンプリングし全体を構成するように設計されている。楽曲は"人の直感する状態"についてという極めて抽象的なテーマについての考察から発想された。木管アンサンブルで演奏する音は五線譜に書かれた一般的な音であるが、コンピューターがサンプリングした後に処理する律は15平均律(1オクターブを15音に等分した平均律)を用いる。これは、人間の扱う領域から遠い響きを象徴するものとして採用している。また、楽曲中には第1クラリネット奏者とサクソフォン奏者に、循環呼吸を用いた単音のロングトーンを要求した箇所がある。これは、超越的な目的に向かう、人間側からの超人間的なあり方である。楽曲はそうした人間的な領域と超人間的な領域との交差が計画されている。

今回は舞台上での演奏ではなく、展示空間内に設置され再生される音楽としての展示である。6つのスピーカーの中央に置かれる特殊スピーカーは木管アンサンブルを象徴しており、ここからは本展のために録音された初演者メンバーによる演奏音流れる。コンピューターは、その演奏音をリアルタイムに録音／加工処理し周りの6つのスピーカーへ出力していく。演奏者が不在というほかは、作品の上演に必要な理想的なシステムによって楽曲は再生される。

設置音楽とは

"設置音楽"は2017年にワタリウム美術館において坂本龍一氏が高谷史郎氏(空間構成・映像)と共に行った展覧会『坂本龍一 | 設置音楽展』(2017年4月4日(火)-5月28日(日))において使用された展覧会タイトルであり、重要なキーワードである。多くの一般的なサウンド・インсталレーションとの違いは、時間軸をはっきり持つ音楽の存在がまず先行しており、その理想的な再生という視点に重きが置かれている点にあるだろう。今回、坂本龍一氏の許可を得た上で設置音楽という言葉を使用した。

.....

<p><関連プログラム></p>
<p>7月17日 (日)14:00～15:30 福島論アーティストトーク ゲスト：桑原ゆう(作曲家)</p>
<p>8月28日 (日)14:00～15:30 コンサート 「エレクトロニック ラーガのための室内楽」 出演：福島論 福島麗秋 濱地潤一 飛谷謙介(Mimiz) 鈴木悦久(Mimiz) 《エレクトロニック ラーガ》(佐藤慶次郎、1979年、岐阜県美術館所蔵)を演奏。</p>
<p>https://www.iamas.ac.jp/af/08/</p>


<p><公演情報></p>
<p>9月18日 (日) 13:00開場 14:00開演 佐治敬三賞受賞記念-ぎふ未来音楽展2022 三輪真弘+福島論 二人展</p>
<p>問い合わせ先：サラマンカホールチケットセンター 058-277-1110 主催：サラマンカホール 共催：情報科学芸術大学院大学[IAMAS]</p>
<p>https://salamanca.gifu-fureai.jp/10114/</p>
